

野外調査と地理学

中田 栄一

一、地理学と野外調査

地理学は地表の諸地域を対象とし、その実情を認識し特性を把握する地誌を基礎とするゆえに、諸地域に関する研究資料の収集には野外調査が基本的操作であるとされ、かつては農業経済学、農村社会学、採訪を主要な手段とする民俗学、自然科学系の地質学や生物学とともに野外調査を研究法の主体に置き、調査法に関する数多くの文献が出されてきた。しかし、第二次世界大戦後にいたり、米国などから実証的方法が諸科学の研究に導入されるにおよび、さまざまな人文・社会諸科学の分野においても野外調査が行なわれるようになり、日本人文科学会や九学会連合など、諸科学間の協力や共同調査、総合調査が実施されてきた。

野外調査と地理学（中田）

従来、野外調査を研究の主体としてきた地理学は、その間において先導的役割を果たすとともに、諸科学から多くの課題や研究法・調査法を学んだ。

諸科学間の協力や共同調査は、学問の発展にとって極めて望ましいことではあるが、いっぽう、各科学の野外研究における役割や任務について多くの反省と検討を余儀なくされた。各科学はそれぞれ専門とする対象や領域、方法をもつ独立科学であり、それぞれ学問の発展のうえに果たすべき役割や責務を有している。本来、野外調査を主体とする地理学の研究において、野外において何をどのように調べ、他の科学とともに学問の発展に寄与するかを改めて反省し、考察する必要性に迫られたといえるであろう。かつて九学会連合の共同研究や共同調査に参加し、またさまざまな委託調査に参加して、諸科学の専門家と協力を行なっ

きた筆者の体験から、具体的に当面したいいくつかの問題について述べてみたい。

二、共同調査における地理学の役割

わが国における各学会・学問間の研究・調査の上での協力態勢や学際的研究は、第二次世界大戦以後さかに行なわれるようになったが、はたして十分に満足し得る成果があげられてきたかどうか疑問も多い。一例として、筆者の参加した九学会連合の共同調査について考えてみたい。

九学会連合は、第二次世界大戦後間もなく、渋谷敬三氏の提唱によって組織され、共同研究や共同調査が始まったが、その趣旨は、比較的研究領域の近接している学問間の協力態勢をつくるとともに学際的研究を目指すものであった。当初は少数の学会で始められたが、参加学会が漸次増加し、一時は一〇学会にまでなった。加入学会は、日本地理学会をはじめ日本社会学会、日本心理学会、日本宗教学会、日本人類学会、日本民族学会、日本民俗学会、日本語学会、東洋音楽学会などで、日本考古学会も加入学会であったことがある。いずれも、それぞれの学問分野における日本を代表する学会であるが、歴史学、法学、経済学、政治学などの重要な分野は、「日本を代表する」学会がは

つきりしないため加入しておらず、これらの学問分野に関する研究・調査は、加入学会がそれぞれ関連のある部分で担当した。例えば歴史学の分野は、日本地理学会の歴史地理学の領域、あるいは日本民俗学会などが関連事項の研究・調査にあたった。

日本地理学会は日本を代表する地理学の学会として加入し、文部省科学研究助成費をうけて、対馬、能登、奄美大島、佐渡、下北、利根川流域、沖縄などの共同調査や共通課題による研究発表会に参加し、調査報告書や機関誌「人類科学」にその成果を発表してきた。毎回、日本地理学会からは、地理学の二大分野である自然地理学と人文地理学の領域からそれぞれ幾名かの参加者があったが、このうち自然地理学の領域は日本人類学会とともに自然科学の系列に属しており、他の加入学会の担当できない独自の領域をもち、調査対象は、人間活動から遊離したたんなる自然ではなく、他の学会の担当する人文・社会的諸事象に関する「自然環境」であることが注意を要する点であった。しかし人文地理学の場合は、他の諸学会の調査対象とする地域の人文・社会的諸事象をも同様に調査対象としており、他の学会からの参加者とは異なる視角から、異なる問題を異なる方法で扱い、地理学としての成果をあげて共同調査に協力することが必要であった。

共同調査を進めるにあたって最も注意を要する点は、それぞれの科学の専門性を尊重しそれを生かしながら、しかも相互の協調をはかり、共同調査としての成果を高めることであった。すなわち、各学会からの参加者の専攻する学問は、それぞれの対象や専門領域、あるいは研究調査法をもっている。その専門性を生かしながらしかも共同調査の成果をあげることに努力を要した。相互に努力し協力しながら他の学会の調査やその成果をみてみると、人文地理学の調査は他の学会の参加者の調査とかなり相異していることが感じられ、中には学ぶべきものが多いながら、視角、領域、課題、方法などにおいて相異するものがあることが痛感されてくる。わが国の地理学の専攻者の中には、他の

や共同調査は、自らの学問を反省し、追究を深める絶好の場所であり機会であるといえよう。

諸科学の深い分析や整然たる理論に惹かれ、学問間の協力、学際的研究の必要性が叫ばれるにおよんで、地理学そのものの立場や視角、方法などを省ることを怠る傾向があり、このため、一部には自ら専攻する地理学に卑屈感をもつ者すらみられる。他の科学の視角や方法などをよくに認識しようとせず、地理学についていたずらに独断的概念をもつことはもちろん避けられるべきであるが、自らの専攻する学問に関して十分な追究を行わず、卑屈感をもつにいたることは、学徒として無責任極まる態度であるといわねばならぬ。九学会連合などにおける諸科学間の協力、共同研究

一般的にみて、九学会連合に参加している地理学以外の各学会では、調査対象地域の人文・社会的諸事象のうち、専攻科学の対象のみに限り、その実態を忠実に把握し深く分析しようとするが、それはあくまでそれぞれの科学の対象を認識しその分析を行ううえでの事例として行うものであり、当該対象地域そのものの研究を主眼としていないことである。したがって、日本のいかなる地域の事象であろうとそれは大した問題でなく、本質的には人類社会や人類文化の諸現象の一事例として扱われる傾向が強く、地域性格としては、せいぜい日本と外国の差異くらいしか問題にされないことである。それは佐渡であろうと下北であろうと利根川流域であろうと大した問題でなく、せいぜい日本と外国、西洋と東洋程度の地域的差異くらいしか関心とされない。もちろん、九学会連合の共同調査の目標の一つとされている日本文化の源の探究やその伝播や展開の過程についての関心はあるにせよ、地域性格や構造についての関心は極めて薄弱であるということである。日本語学会や日本民俗学会のように、中には地域性格や分布、あるいは地域的構造についても関心をもち、注目するものもあるが、これはむしろ地理学的関心というべきものであり、

言語地理学的、民俗地理学的興味といふべきものであつて、当該科学の終局に目指すものとはいえない。むしろこのような興味や関心は、言語学や民俗学と地理学との交流とか学際的研究ともいふべきものであつて、九学会連合の趣旨からみて極めて望ましいものであるといえよう。

地理学は諸事象を地域に即し、地表の具体的地域との関わりにおいて認識し、特に人文地理学は地域の自然との関わりにおいて人間の活動や社会・文化をとらえていく。それは、社会や文化そのものの構造や一般的性格をとらえようとするのではなく、あくまで地域空間の構造において眺め、地域におけるその意義、地域の変貌や動態におけるその役割を認識しようとする。地表の具体的地域に即して社会や文化をとらえようとするため、その地域的特性や分布とりわけ地域により異なる自然環境との関わりや他地域との関連に注目する。すなわち人文地理学は、具体的地域における社会や文化の特質を、それぞれ個々の人文的社会的事象を対象とする専門諸科学と協力して明らかにし、地域のいかなる自然とどのように関わりをもちながらどのような形成され成立したかを分析する。九学会連合の利根川流域共同調査に際し、日本心理学会は「流域の一農村における新しい農業技術の伝播とその社会心理的要因」を課題としてとりあげたが、それはこの課題に関する心理学の一事

例研究として調べられており、「利根川流域」を調べようとしたものではない。すなわちこの課題は「利根川流域」を明らかにするためにとりあげられたというより、「農村における新しい農業技術の伝播とその社会心理的要因」とりわけ「技術伝播の社会心理的要因」に関する一事例研究としてとりあげられ調査された傾向が強い。人文地理学の視角からすればむしろ、利根川流域の一農村において、その地域のいかなる条件（自然条件や社会条件）のもとで右の課題の現象がどのように展開しているかを調べる。かくて心理学と人文地理学は一つの地域において相互に協力しながら、それぞれの専門科学の領域に関する問題につき、それぞれの視角からそれぞれの方法によって究明する。

しかしながら現実の問題として、九学会連合の共同調査では、二、三年間の調査では到底調べきれない程度の広さの地域がとりあげられ、各学会はその広い地域の一部の異なる地域でそれぞれの課題に関する詳細な調査を行なうことが多く、このため同一地域における共同調査は行われずしたがって共同討議に際しても相互に噛み合うことは少かつたように思われる。かくて人文地理学は、地域の性格や地域の構造に注目し、地域におけるさまざまな文化や社会が、その自然環境及び他地域との関わりにおいてどのような形成され展開しているかを追究しながら、他の学会の調

査に協力し、また他学会の成果をとり入れながら資料の収集に努め、共同調査、共同討議における学会間の相互の協力に対して積極的に働きかけ、その促進に先導的役割を果たすように努力すべきであろう。

三、応用面における地理学の役割

学問の研究は研究そのものが目的であり、その成果は学問の発達に貢献するものであればよいが、現実的には学問の発達には政治、経済、社会の動きと無関係ではなく、むしろその要請、必要性、すなわち実用的目的によるものが多い。したがって現代の科学では科学性そのものが要求されるいっぽう、その応用面や政策面も強調される。地理学の発達も政治、経済、社会の動きと密接に関わりをもつことは地理学史の示すところである。しかし、今日のように、学問の発達によって専門化が進むと、地理学の応用面についての再検討が必要になる。例えば、地理学の応用面として屢々「地域開発」がとりあげられ、大学や大学院の地理学専攻課程においても「地域開発」に関する科目の設置が望ましいとされる。地理学は地表の諸地域を研究対象とするものであり、したがってそれぞれの地域の開発について追究し、地域の未来像を求めるとともに、その実現への具体的

開発計画や政策を樹立することが地理学の応用面とされる。しかしわが国の現実では、地域の将来について考え開発計画をたてるのは地理学の専攻者よりはむしろ法学、政治学、経済学などを専攻した官僚、政治家、実業家や学者、あるいは地域を構成する個々の事象の研究に従事する社会学、心理学、農学、林学、土木工学などの出身者や専攻者である。わが国では、地理学専攻出身者や専攻者で地域開発に実際に参加する者が漸次多くなっているようであるが、他の諸科学の専攻分野に比べて必ずしも多いとはいえない。すなわち、地理学の応用面の開拓は、少なくともわが国の現実では、十分に進められているとはいえないであろう。

實際上、計画や政策には、一つの科学の応用のみで済む場合は少なく、いくつかの学問の専門分野の協力が必要である場合が多い。それは、現実目標とされるものは一つの科学の対象に限られる場合よりは、複数の科学の対象の総合的性格をもつものが多いからである。農業開発一つをとりあげても、農学、農業経済学、農業工学、土壌学、気象学その他数多くの科学の共同的应用によるものである。

まして「地域開発」などという広汎な分野に亘るものに関しては、多くの専門科学の協力によつてはじめてその目的が達成されるものである。「地域開発」の問題は、地理学の応用のみで解決されその目的が達成されるのではなく、

地域を構成し相互に関連のある諸事象を対象とする諸科学の応用面の協力によって果されるのである。この場合、地域開発の現実的計画の策定やその実施において、地理学はいかなる方向からいかなる分野を担当するかを十分に検討してかからねばならない。

立教大学在職中、筆者はいくつかの委託調査をうけ、さまざまな地域のさまざまな問題に関し、地理学の果たすべき応用面につき考えさせられた。要請された課題はもちろん、地理学の応用のみで解決されるものではなく、特に調査の責任者として受ける場合には、問題の解決にあたってはいかなる科学のいかなる分野の専門家の協力を依頼するかについてまで配慮する必要がある。委託をうけた課題は、筆者の地理学における専攻分野により或程度限られてはいるが、協力者はかなり広い分野にまで亘ることが多かった。そのいくつかをあげると次のようなものである。

第二次世界大戦終了後間もなく、G・H・Q社会調査部から委託されたものは、当時、日本政府で計画中の漁業法、漁業協同組合法の改革に関する、G・H・Qとしての指導のための基礎資料の収集であった。全国各地のさまざまな型の漁村八カ所ばかりを選び、四つの調査班がそれぞれ一カ月をかけて実態調査を行い、報告書を提出した。参加者は社会学、民俗学、政治学、地理学などの専門家であった。

って実施した。

以上のほか二カ年に亘る北海道防風防霧林調査を林学、財政学、農業工学、気象学及び地理学などの協力によって実施、四国山地、庄川上流地域、伊那谷、越美山系などの災害と治山に関する調査、伊豆半島、利根川上流域、房総半島などの保安林に関する調査なども行い、また、九州の祖母・傾固定公園における祝子川上流地域の林業開発と自然保護問題に関する調査も印象に残るものであった。

以上の調査はいずれも要請された課題目標に答えるべく、地理学その他関連諸科学の専攻者の協力により実施されたもので、十分にその目的が達成されるよう努力が払われた。そして地理学の場合、他の諸科学と協力して、いかなる立場、側面から、いかなる事項に関しいかなる方法で要請に応じることができかが問題であった。対象地域の既成の地誌は、基礎資料として或程度の利用は可能であるが、一般には概括的で荒削りであって、要請された課題に応じることが困難であり、むしろ地理学の一般的知識や調査法の活用による場合が多かった。そして、対象地域のさまざまな事象をそれぞれ対象とする諸科学の専門的な調査に対し、地理学はいかなる事項をいかに調査することによって要請された課題目標を達成するかを深く考えざるをえなかった。地理学は「地表の諸地域」を対象とし、それを統一的全体

昭和三十年代、建設省からの委託で中央高速自動車道の開発効果予測調査を実施した。当時、計画されていた線型による沿線諸地域の経済開発が中心であり、農業経済学と地理学の専門家が調査に参加した。

昭和四十年代、林野庁、国土庁、県などからの委託によるいくつかの調査を行った。その一つに、当時、わが国の各地の山岳・丘陵地帯に計画されていた特定森林地域開発林道（俗称スパー林道）や大規模林業圏策定のための大規模林道の開発効果予測調査がある。わが国の山地、森林の多目的開発利用を目ざすものであるが、筆者は特に北海道の道東線や飛越山地線、白山線などについて実地調査を行った。地理学のほか林学、農業経済学、農業工学、財政学、交通工学などの専門家が参加した。特に石川県から委託された、石川県の手取川上流の中宮温泉から岐阜県の庄川上流の白川村にいたる有料の白山線に関する調査は、「白山線開設に当り、諸種の自動車一台当りの利用料金の算定」が要請され、極めて多方面に亘る調査を必要とするものであり、地理学、林学、農業経済学の専門家の協力によって要請に答えるべく努めた。また、大規模林業圏開発調査は、四カ年に亘る全国総合開発計画調査の一環である「中部山岳地域開発計画」調査へと発展し、地理学（社会学・観光地理学・交通地理学など）と林学の協力によ

において認識する、とか、地域性の把握であるとかなどの地理学に関する漠然としたあいまいな概念規定では、地理学は諸科学と協力して要請目標を達成することは極めて困難であろう。地理学はその実践性は薄弱であって、せいぜい教育的価値しかない、などといわれるのも、そのような地理学の概念規定に由来するといえる。

特定森林地域開発林道や大規模林道の開発効果予測調査の場合、地域の自然環境については地質学者、気象学者、土壌学者、植物学者など、農業については農学、農業経済学など、林業については林学、植物学、造園学など、道路の開発については交通工学や土木工学など、地域社会については社会学などの専門家が担当するが、地理学者、殊に人文地理学者は何をどのように担当し調査すればよいのか。

この場合、要請された課題目標達成に最も必要なことは、地域の自然の性格、農業や林業、道路の開設工事、村落社会などの個別的課題についての調査というよりは、自然環境の特質と地域経済、地域社会との関係、道路や地域経済、地域社会との関係、したがって隣接地域や他の地域との関係などに関する調査であり、地域全体の特質（他の地域との比較によって）及びその構成や構造、地域における各事象間の関係、地域の形成発展、あるいは変化の歴史地理学的解明、そして道路開発の地域に及ぼす影響に関する一般

的知識（これは諸地域に関する研究の積み重ね、比較、展望によって得られる）の把握であり、これは個別的な事象をそれぞれ対象とする専門科学の目ざす本来の目標ではなく、人文地理学の主要な課題ともいふべきものである。もっとも、これらの課題は、要請された課題目標の達成には必要であるとして、また地理学の専門家自身がこれらの課題は人文地理学の課題ではないとするのならば論外である。すなわち、地理学の応用をはかり、その実践性を高めんとするならば、地理学（自然地理学、人文地理学）自体の対象や方法につき、他の科学との比較関連により、明確な認識と意識が必要であるということである。そしてこれは、現実的には、他の諸科学との共同調査を行うことによって具体的に認識される。なお、右のさまざまな委託調査における地理学の具体的な役割、協力対応の仕方、課題や方法などの具体的内容については別稿にゆずりたい。

四、むすび

諸科学の協力による共同調査は、各科学の研究の深化、専門化が進んだ今日では、極めて困難な問題であるとされ、その努力が払われているにもかかわらず、必ずしも十分な成果をあげていないことは九学会連合の共同調査によって

もわかる。ただ調査地域を同じくするだけで、各専門科学それぞれ勝手な課題の個々別々な調査の集積では共同調査の成果をあげることはできない。もちろん、同一地域における各専門科学の調査を行うだけでもやらぬよりましであり、何らかの成果はあるであろうが、共同調査の効果を高めるには、それぞれの科学の課題や方法を互に理解し合うことにより、各科学の担当課題や協力の仕方、調査の方向や方法につき十分検討し、深く考察することである。地理学の場合、先ずその本質や方法につき十分吟味反省し、他の科学の調査といかに協調し、共同調査の成果を高めるかを考えなければならぬ。地理学の対象は地表の諸地域であり、その特性を認識し、統一的全体において地域を把握することであるとの漠然たる概念規定では、他の科学との十分な協調ははかられず、また、自らの学問の専門的課題と方法を意識しながら、いかに共同調査に参加するかを考えないでは地理学の参加する意義はないであろう。地理学にはA・V・フンボルトやK・リッター以来の近代地理学の伝統があるが、それをふまえるとともに、地理学のさらにいつそのの発達をはかるためには、やはり野外に出て他の諸科学と協力し調査を行うことにより、地理学の本質や方法につき十分に反省することである。野外はやはり地理学の研究の場所であり、新しい地理学は野外において創

造されなければならない。

（元 立教大学文学部史学科教授）